

# 高岡のあゆみ



「桜谷古墳群」(高岡市太田)

## ○高岡のあけぼの

高岡では、今から約1万年前頃から人々の生活が始まりました。高岡古城公園のおだげやぶ小竹藪でも、縄文時代中期後半から後期(4500～3000年前)までに営まれた小竹藪遺跡が確認されています。当時はまだ自然の恵みをたよりとする採集・狩猟生活が中心だったようです。

その後、日本列島には弥生文化が伝来します。最初にこの文化が伝来したのは九州地方でしたが、石塚遺跡などにもみられるように、弥生時代の中頃には高岡にもこの文化がでんぼ伝播してきます。

稲作は、計画的な栽培や貯蔵を可能とするものでしたが、このことはその後の日本の社会を大きく変えていきます。周辺地域を統括するしゅらう首長を誕生させ、特別な墳墓も造られるようになります。その傾向は時代と

ともにさらに増大し、やがて古墳やクニが形成されます。高岡市内にも、桜谷古墳群をはじめとする多くの古墳群が造営されたほか、「伊弥頭国造」などの豪族が出現したとされます。

奈良時代には、高岡市の伏木に国府や国分寺などが造営され、高岡は越中の政治・文化の中心地となりました。歌人として著名な大伴家持(718頃～785)も国守としてこの地を訪れており、高岡で詠んだ多くの歌は『万葉集』に収められています。当時の国家事業であった東大寺領荘園の造営も家持の時代に行われますが、市域には須加荘・榎田荘・鳴戸荘などがおかれたものと考えられます。

中世の高岡は戦乱の時代でした。市内には源義仲・義経や、後醍醐天皇の二皇子(恒性・宗良)らゆかりの史跡があります。戦国時代は国人(石黒氏等)、一向一揆、守護代神保氏らのほか、能登畠山氏、越後長尾(上杉)氏らの勢力が、守山城などを舞台に激しく争いました。そんな波乱にみちた時代も、前田氏の所領となって以降は、徐々に平穏を取り戻していきます。



「守山城跡」(二上山)

## ○城下町から商工の町へ



「前田利長画像」(金屋町本)

高岡の町は、慶長14年(1609)9月13日、前田利長(1562～1614)により開かれました。利長は加賀百万石の祖・前田利家の長男として生まれ、越前府中・加賀松任を経て、越中守山・富山・金沢・富山と拠点を移しながら、織田・豊臣・徳川と主をかえつつ、戦国乱世を生き抜いてきました。

高岡城は標高15m前後の関野台地に築かれた平城です。面積約21万㎡(東京ドームの約4.5倍)のうち3割が水堀で占めます。水堀をはじめ7つの郭と土橋からなる「重ね馬出」形式の縄張りほぼ全てが保存され、県内で唯一「日本100名城」に認定されています。城の南西側の台地上(枳形の内)には武家屋敷が、台地下の西から北にかけては町人地が開かれました。利長は、多数の商人のほか、鋳物師などの職人も招き、町政や農政にも尽力しました。しかし、開町からわずか5年後の慶長19年(1614)5月20日に、利長は53才でこの世を去ります。さらに、その翌年に下された「一国一城令」により高岡城は廃城となり、まず武士たちが、つづいて町民たちが高岡を離れ、町は一時の勢いを失いかけていきました。

しかし、利長の遺志を継いだ3代前田利常は、高岡を城下町から商工の町へと変えていきました。この改革は今日の高岡の発展の基礎となり、現代にも息づいています。

利常は、町政組織の改善をはじめ、寛永5～6年(1628～29)には北陸道を高岡町内で改変しました。また、米場・綿場・御荷物宿・魚問屋・塩問屋の創設をはじめ、城跡への御収納米蔵と御詰塩蔵の設置や、高岡を麻布の集散地とするなど、様々な殖産興業政策を実施していきます。

さらにのち加賀藩は、高岡に藩で唯一の綿市場を設置し専売権を与えました(1824年)。また、材木・肥料・雑穀などの集散に便宜をはかるなど、商業の保護や育成につとめ、高岡は商工の町として発展を遂げ、“百万石の台所”と言えるほどの経済都市に成長していきます。

幕末の頃、高岡の人口は3万人前後にまで達していました。その生活必需品を供給するため、当地では小売業も繁盛していましたが、高岡商人の根幹は、加賀藩全域の商品の流通を担当する問屋業でした。



「前田利常画像」(那谷寺本)

## ○近代化へのあゆみ



「高岡米穀取引所」(高岡市御馬出町)

明治になると、すぐさま高岡商人は、綿・布・肥料などを扱う商社を次々と設立しますが、米市場の設立は、当時の石川県(現在の富山県を含む)や金沢商人の反対で果たせずにいました。

しかし、明治16年(1883)、富山県が石川県から分離独立をすると、高岡は経済の中心となることを目指し、2年後には高岡米商会所(後に高岡米穀取引所と改称)を創設します。これは1824年、高岡米場廃止以来の悲願を果たしたことを意味します。

高岡経済の中心地であった「山町筋」の豪商らは、明治22年(1889)に高岡銀行を、同28年には高岡共立銀行と高岡貯金銀行を設立します。

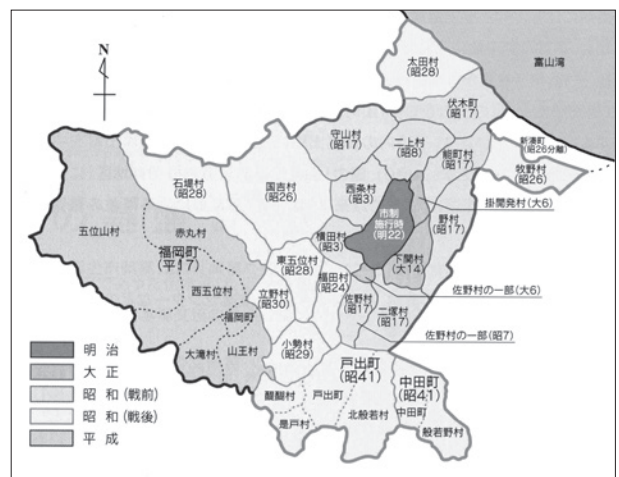
また、同26年には日本海側初の紡績工場「高岡紡績(株)」を設立するなど、高岡の近代化に尽くしました。

なお、同年には戸出物産合資会社(綿織物業)が設立されるなど、近代化の波は周辺にも広がりをみせます。また、この頃には“伏木近代化の父”とうたわれた藤井能三らが、中越鉄道(現JR城端線・氷見線)の設立に尽力し、官設北陸鉄道(現あいの風とやま鉄道)と競って線路を延ばしていましたが、これらは富山県西部の産業や経済をさらに発展させてゆく原動力となりました。明治33年(1900)6月には、市街地の約6割を焼き尽くす大火が起こります。しかし、山町筋は防火に優れた土蔵造りの町並みに姿を変えて復興を遂げ、高岡の産業や経済は、その後もますます発展をしていきました。

## ○高岡市の領域の進展

明治4年(1871)の廃藩置県を皮切りに、高岡町の所管は目まぐるしく変わっていきませんが、明治22年(1889)4月1日の「市制・町村制」の施行にともない、全国31市の一つとして「高岡市」が誕生します。ちなみに、当時の人口は29,292人でした(31市中23位)。また、このとき県庁所在地以外で市となった都市は、高岡のほかは5都市にすぎませんでした。

誕生当時の高岡市域は、藩政期以来の高岡町などを基礎とする小さなものでしたが、その後は統合や編入を経て徐々に市域を拡大していきます。そして、平成17年(2005)11月1日の旧福岡町との合併により、現在に至っています。



「高岡市域の移り変わり」